

「足短侮蹉膿跌王（雄）」のこと （あしみじかぶさのてつおう）

昔、尾張の国に、霞目で異様なる短足の男がいた。男は滅法強く、自ら王と名乗り平然としていた。これには尾張国司も手を焼いていた。気味が悪いのだ。男は何時如何なる時も、人の背後から声を掛ける。しかも、その気配さえも全く無い。

時には馬上の時もあるが、馬の蹄の音もせぬと言う。「気味が悪い」としか他には言い様が無かった。その上、昼日中に、その姿を見掛けた者は誰一人も居らず、決まって黄昏時から出沒する。食べ物と言え、生ものを好まず、必ず鉄鍋で火を入れて食す。また極端に不浄を嫌った。男に不敬不浄が有って命を取られたと云う噂まであった。

安倍晴明の自宅が尾張狩津荘上野邑にあった頃の話である。ある日、晴明の背後から突然唳れ声が上がった。晴明は驚いた。およそ己の背後の気配に気付かぬ事は無い、それが晴明だ。声の主は「わしは、足短侮蹉膿跌王だ」と名乗った。

晴明は振り向きもせず、「はて、我が国に真の君は唯一人。二人の王はあらぬもの」と答えた。跌王は鼻先で笑った。「ここに居るは」と霞目をキョロキョロさせた。「晴明の術が、どれほどのものか。俺様が試してやる。晴明、術を見せろ」ゆっくり振り返り、その気配を間近で見た晴明は、凄愴荒涼たる恐るべき跌王の姿に、背を向けたまま言霊を発した事を後悔したが「術は見世物にあらず」と静かに答えた。

男は赤ら顔で、どうやら左右の足の長さが、かなり違うようだ。しかし妙な事に音を立てる事も無く身体も揺れていない。

「正に化生か。ならば…」と晴明は、手元にある筮竹をするすると動かした。「早朝、熱田の海に大蛸が浜に上がる」

跌王は、また鼻先で笑った。「そんな事なら、俺でも解すは」晴明は「ならば、その大蛸を石に替えて見せよう」と言ったとたん、跌王は見る見る不機嫌になった。

「およそ海中に幾万種の魚介あれども、自ら足を持つ蛸は、海の靈獣なるぞ。勝手に石なんぞに替えさせはせぬ。晴明！明日は日が差さぬぞ。出来ねば汝の足を切ってくれるは！」

こう吐き捨てると、音も無く出て行った。晴明は、すぐさま天運天行を読んだが、雨の降る心配は全く無かった。しかしその翌日、驚愕すべき事が起こった。厚い雲が隙間無く覆い被さり、時折、小雨交じりの昼なを暗い日となったのだ。

その頃、熱田の海では大蛸が浜に上がり、生け捕りにした漁師共が騒いでいた。漁師の親方

が、蛮刀で人の太股もあろうかと思える、大蛸の足の一本をどすんと切り取り、生で齧りついた。大蛸は痛みを耐え、くねくね動いた。その時だ。いきなり親方の真後から、嘎れた恐ろしい声がした。「切ったな…。生で喰らったな」漁師は後を振り返った。異様な短足の男に、一同に嘲笑の聲が上がった。「笑ったな…」 跌王の剣が一瞬、空を切った。するとどうだ。親方の太股が血飛沫を上げ、空を飛んだ。

「ひえー！」 劈くような悲鳴が、吹き上げる血飛沫と潮風に飛んだ。跌王は、怒太い蛸足を掴み取ると、ブツブツ呪文を唱え、親方の足にぐいっとひっつけた。その瞬時から、親方の片足は蛸の足となり、自分の意に反し、くねくねと動き出した。跌王は呪文を唱え続け、次にまだ血の噴き出ている親方の足を掴み、それをなんと大蛸の足に付けたのだ。

更に跌王は何やら印を結び、呪文を唱える。やがて見る見る人の足は蛸の足に変わっていった。蛸は無傷の八本足に戻った。プハー、呼吸口が大きく開いた。喜び勇んだのか、大蛸が一層激しくくねくねと動き回った。漁師共は声も出ず、ガタガタ震って薨り込んだ。

「海水を汲み上げ、蛸を入れよ！」 跌王は怒鳴った。漁師は泣きそうになって「そう申されましても、これ程の大蛸を入れる樽は、すぐには見つかりませんが…」と恐る恐る言った。跌王は「後を見よ」 漁師の後には巨大な樽が置かれていた。跌王に従う式神が運んだ樽だ。寒々しい恐ろしい光景だった。

「清明宅まで運べ！」 総ての漁師は、自分の後に化け物が張り付いたように思えた。自分の耳の真後から声が聞こえる。恐ろしさは頂点に達した。奇妙な事が起きた。右へ進まんとする足が竦み、左へ左へと進んだ。とうとう清明宅とは真反対の船塚の地に向かった。蛸樽は益々重くなり、漁師はそこに倒れた。

跌王は真っ赤になって馬から降りた。蛸樽の中は石に変わっていたのだ。「おのれ清明！」 跌王は唸りを上げて姿を消した。すると、とたんに辺り一面見る見る明るく陽が差したと言う。

何故、跌王一行は清明宅に着けなかったのか。それは清明が禹歩、即ち反閤歩行の術を掛け、跌王と漁師の足を封じたゆえ、思いの逆方へ進んだのだ。その後、漁師の親方は、己の足が元に戻らぬものかと清明に懇願したが、いかに清明でも、どうする事も出来なかった。

それだけでは無かった。親方に毎夜驚愕すべき事が起きるのだ。夜中に目覚めると、何と半身が海中に浸かっているではないか。異変は度々起きた。熟睡すると蛸足が勝手に動き回り、体を引き摺って海中に沈むからだ。親方は不眠不休の日々が続いた。しかし長くは持たなかった。九日目の夜中、恐ろしい程の睡魔に襲われ、意識もはっきりせぬまま蛸足はくねくねと巧みに動き海に向かう。プファー、プファー、いったい何処から聞こえるのか、奇妙な音

がする。親方だ。腰がどうなったのか、一捻りし体は仰向け、首はぐらぐら揺れ動き意識は有るようだが、もうどうにもならない。苦しみに歪んだ顔に血の気は無い。元結も切れ、髪は潮風に力無く揺れた。身の毛もよだつおぞましい姿としか言いようがない。プハァー、プハァー、音は親方の腰の辺りから聞こえるようだ。蛸の呼吸口だ。よく見れば臍の横に蛸の目玉が出来ているようだ。ぐるぐる動き回っている。

ここ十日余りで足は倍の長さに成長していた。親方のもう一本の足は、まだそのままで残っていたが、ぐらぐら揺れるだけで自らの意思では動くとは思えなかった。腸から背にかけては、殆ど蛸そのものと成り果て、足の動きに添って、ぶよぶよと動く。それも波打ち際には一段と動きが早くなった。

辛うじて人間と思える、頭と胸の上部は、仰向けになったまま海水に浮き上がった時、恐怖と絶望から凍るような悲鳴が潮にのった。両手を上げ助けを求めたが、容赦なく海に沈んで行った。晴明は総てを見ていた。安倍晴明ほどの者を震撼させた恐るべき男、足短侮蹉膿跌王。人間か、はて又、化生か物の怪か。

晴明は式神を使って馬上の跌王の行く先を付させたが、凄まじい速さで駆け抜け、辻を曲がれば消え失せる。晴明の式神ですら動きを封じられてしまうのだ。晴明は何とか跌王の道筋を読み、辻ごとに式神を侍らせた。今宵は月もでぬ暗闇と来る。真に跌王には相応しい。舞台は整った。

晴明は待った。例え晴明でも、その式神でも、己の背後に立たれるまで、跌王の気配を知る事は不可能なのだ。晴明の背後からいきなり声がした跌王だ。「晴明、石を蛸に戻せ！」晴明は、静かに振り返り誠を尽くして言った。「ならば、海中に消えた大蛸を元の人間に戻せ」切迫した空気が漲り、晴明の屋敷の総てが歪んで見えた。馬上の跌王が飛び出る瞬間だった。

空気を捻じ曲げ跌王が馬と共に駆け抜ける。かど辻の式神が巧みに跌王を付けた。やがて行く手に巨大な森が見えた。馬上の跌王は森に消えた。森は「暗闇の森」と言われ、忌むべき場所と恐れられ、誰一人寄り付かぬ森だった。

あとがき

拙い原稿は、まだまだ続きます。一枚捲れば、そこには足短侮蹉膿跌王の死とあります。話は益々恐ろしく陰湿になりますので、こゝらで終りと致しましょう。

45年前、私がまだ中学生の頃、この跌王の事に思いを巡らせ、ノートに書き留めた一冊が残してあります。そこには

『足短侮蹉膿跌王、この異様な名前は跌王の死後に付けられたもので、決して生まれながら短足では無かった。侮は侮辱の侮ではないか。残りの蹉膿跌王、膿を一字飛ばして読んで気が付いた。蹉跌ではないか。一字ずつ分解すれば、足に差が出来、足を失うと読める。国語辞典によれば「つまづく意、失敗してゆきづまる」とあった。残る一字の膿、これは医学用語で「うみ」の意となる』

と汚い文字で書かれてあった。「足は短く、躓き、失敗、侮辱されその上、身は膿だらけ」となる。ああ何と云うことか、これ以上の酷い名前は聞いた事がない。実は跌王は、罌り殺しにされたのです。それも森の中で。それが真相です。

恐れ入らずの森、忌むべき森、その思いの念は、闇之森八幡社創建以前に深根有りと思えるのです。異姿異能なる故に、人を震撼させ、恐怖に駆り立てる。故に罌り殺しにされる宿命を背負わされた。それが足短侮蹉膿跌王だった。

伝説は、いよいよここから大詰めとなり、跌王は壮絶な死を迎えます。跌王と闇之森、森と八幡社、八幡社とそれを信仰する直向な氏子達。幾世紀にも亘り、それらとの交渉は、決して解ける事のない赤い糸となり、複雑に絡み合っただまじい御利益の霊験となり、今、その総てが相克の坩堝の中に溶け込んでいくようです。

相も変わらずの拙い原稿を最後までお読み頂きまして有難うございました。続きは又、お目に掛かった折に、お話致しましょう。それでは皆様、御機嫌よう。合掌